

【P178～P179 4行】

第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

第1節 資本組成の不変なばあいにおける蓄積に伴う労働力需要の増加

マルクスは、冒頭、本章の課題を、資本の蓄積すなわち資本の増大が労働者階級の運命に及ぼす影響を研究することである、と述べています。その場合に重要な要因となるのが「資本の構成」であり、そしてまた、それが蓄積過程の進行途上で受ける色々な変化であるとして、まず「資本の構成」の概念を明らかにします。

※運命とは、人の意思や思いを越えて人に幸・不幸を与える力。

資本の組成は、

■ 価値の側から見れば、

① 不変資本または生産手段の価値＝原材料や機械

② 可変資本または労働力の価値＝労働賃金の総額

とに分かたれる比率によって規定される。

■ 生産において機能する素材の側から見れば、

① 生産手段

② 活きた労働力

とに分かたれ、充用される生産手段の量と、その充用のために必要な労働量との比率によって規定される。

前者を「資本の価値組成」後者を「資本の技術的組成」というと述べています。また、この両者には密接な関係があるが、資本の技術的組成によって規定されその諸変化を反映するかぎりにおける資本の価値組成を、「資本の有機的組成」というと述べています。

そして、資本の構成は、個別資本の構成、特定の産業部門の平均構成、さらには全ての産業部門の平均構成の総平均である一国の社会的資本の構成、の三つに分かれますが、マルクスが問題としているのは、個別資本のもとでの個々の労働者の運命ではなく、労働者階級全体の運命だということです。

【P179 5行～P180 12行】

資本の組成も不変、すなわち一定量の生産手段または不変資本は、それが動かされるためには常に同量の労働力を必要とすると想定すれば、資本の増に比例して労働力にたいする需要と労働者の生計財源は増大し、資本が急速に増大すればそれだけ急速に増大する、と述べています。

元資本の資本構成は追加資本にも引き継がれ、その場合でも可変資本つまり労働力への需要は増大します。というのは剰余価値が追加資本に転化すること自体

が生産手段や労働力（あるいは生活手段）への新たな追加需要を生むことになるからです。

たとえば新たに生じた新市場や新投資部面が開かれるというような致富衝動（裕福になりたい）との特別の刺激のもとでは、資本の蓄積欲望が労働力又は労働者数の増加を凌駕し、労働者に対する需要がその供給を凌駕し、したがって労働賃金が騰貴する。ということがありうる。イギリスでは、十五世紀の全体と十八世紀の前半期にこのようなことが生じた。と記述しています。

ここでマルクスは「資本の蓄積はプロレタリアートの増殖である」という重要な命題を提示しています。

【P181～P184 1行】

ジョン・ペラーズは「もし10万エーカーの土地と10万ポンドの貨幣と10万頭の家畜とを有する人があっても、自分のほかに労働者がなければ、この富裕な人は、労働者たる以外に何でありえよう？…貧者の労働は富者の宝庫である。」バーナード・ドゥ・マンドゥヴィルも「貧民がなければ、いったい誰が労働をするのだろうか？…」として、労働力の必要性について述べていますが、蓄積過程の機構そのものが、原資本とともに「勤勉な貧民」すなわち賃金労働者の群れを増加させるのであり、資本家と労働者の従属関係について理解していなかったとマルクスは述べています。

他方で、サー・F・M・イーデンが、その『貧民の状態、イギリスにおける労働者階級の歴史』において、「欲望の充足のためには労働を必要とし、それゆえに、少なくとも社会の一部は、倦まず（飽きたりせず）労働せねばならない。」「独立の財産を有する人々は、彼らの財産をほとんど全く他人の労働に負っている」「富者を貧者から区別するものは、土地や貨幣の所有ではなく、労働に対する支配力である」「貧者に適合する者は、劣悪な、あるいは奴隷的な状態ではなく、安易で自由な従属関係であり、財産を有する人々にとっては、彼らのために労働する者に対する十分な影響力と権威とである」と述べています。

マルクスはサー・F・M・イーデンは、アダム・スミスの弟子のうちで、十八世紀に何らかの言うに足る仕事をした唯一の人であると一定の評価を示していますが、部分的に一定の評価をしているだけであることに留意する必要があります。

【P188～ P189 後ろから3行目まで】

労働者にとって有利な蓄積諸条件のもとでは、彼らの資本への従属関係は、耐えられうる形態、あるいは「安易で自由な」形態をまとっている。それは資本の

増大とともに、資本の搾取と支配との領域が、資本自体の大きさと隷民の数と共に拡大されるにすぎない。

隷民たち自身の剰余生産物のうちから、支払手段の形態で、彼らの手に還流してくるので、衣服、家具等の消費原本をより十分に備え、少額の準備金（預貯金）をつくることができる。しかし、衣服、食物、取り扱いがよくなり特有財産が増しても、それが奴隷の従属関係と搾取とを廃止するものではない。

資本主義的生産においては、労働力が買われるのは、買い手の一身の欲望を充たすためではない。買い手の目的は、彼の資本の価値増殖であり、剰余価値の生産、すなわち貨殖（金儲け）が、この生産様式の絶対的法則である。労働力は、それが生産手段を資本として維持し、それ自身の価値を資本として再生産し、そして不払労働において、追加資本の源泉となるものを供給する限りにおいて、売られうるものである。したがって、労働力の販売の諸条件のうちには、それらが労働者にとって有利であるか不利であるかには係りなく、労働力の不断の再販売の必然性と、資本としての富のたえず拡大される再生産とが含まれる。すでに見たように、労働賃金は、その性質上、つねに労働者の側における一定量の不払い労働の提供を含んでいる。労働価格の低下を伴う労働賃金の騰貴は全く別としても、労働賃金の増加は、せいぜい労働者がなさねばならない不払労働の量的減少を意味するにすぎない。この減少は、それが制度そのものを脅かすに至るような点までは、決して進行しえない。とマルクスは述べています。

労働者にとって有利な条件のもとでは、賃金が上昇し、その結果、労働者の資本への従属関係は「耐えられないこともない」形態をまとうことになるけれども、このことは賃労働者の従属関係や搾取の廃止を意味しない。なぜならば剰余価値の生産こそ資本主義的生産様式の絶対的法則であるからです。したがって労賃の増加は不払労働の量的な減少を意味するだけであって、この減少によって制度そのものが脅かされるような点までこの減少が続くことはけっしてありえない、とマルクスは強調します。

【P189 後ろから2行目～P191】

「資本の蓄積から生ずる労働価格の騰貴は、次の二つの場合のいずれかにあたるものである」として、具体的な検討が行われています。

その第一は、賃金の上昇が蓄積の進行を妨げないのでそのまま賃金が継続して上昇する場合。もう一つは、労働の価格の騰貴の結果、利得の刺激が鈍くなって蓄積が衰え、資本の蓄積要求が回復するまで賃金が下落する場合です。

要するに、「第一の場合には、労働力または労働者人口の絶対的または比例的増加の減退が資本を過剰にするのではなく、逆に資本の増加が、搾取されうる労働力を不十分にするである。第二の場合には、労働力または労働者人口の絶対的比

例的增加の増進が資本を不十分にするのではなく、逆に資本の減少が、搾取される労働力または、むしろその価格を過剰にするのである」と。

この二つのケースの考察から、「資本の蓄積における絶対的諸運動が、搾取可能な労働力の量における相対的諸運動として反映するのであり、したがって、労働力の量そのものの運動に起因するように見えるのである。数学的表現を用いて言えば、蓄積の大きさは自変数であり賃金の大きさは多変数であって、その逆ではないのである」とマルクスは述べています。

【P192～】

最後にマルクスは、「資本蓄積と賃金率との関係は、支払を受けない、資本に転化する労働と、追加資本の運動に必要な追加労働との関係にほかならない。だから、それは、けっして、一方には資本の大きさ、他方には労働者人口、という二つの互いに独立な量の関係ではなくて、むしろ結局はただ同じ労働者人口の不払労働と支払労働との関係でしかないのである」と述べています。

以上。